同性婚に対して「伝統的家族の喪失」ならびに「非生殖ゆえ好ましくない」と考える人々の意識を規定する要因は何か
―性・年齢層別分析―

石　田　　仁

1　背景と問題意識

（1）　背景

同性婚の法制化が世界で進み、日本でもいくつかの自治体が同性パートナーの関係を認定する制度を発足させている。これらの動向に対して、賛成の見解もあるが、一部の有識者や政治家、政治団体からは定期刊行物やソーシャルメディア等を用いて否定的な見解も見られた。例えば、『世界日報』(2015年３月15日号)は渋谷区の同性パートナーシップ認定制度に対して「家庭破壊、社会混乱は必至」という大見出しを掲げた。最近の動向としては、衆議院議員・杉田水脈(自由民主党)が、同性パートナーは生殖に結びつかないから税金を投入すべきではない」といった主張を月刊誌『新潮45』2018年８月号で展開した。この主張に対しては７月27日に自由民主党本部前で大規模な抗議行動が起こるなど、大きな批判が沸き起こったが、９月18日発売の『新潮45』10月号はそれらの批判に対抗する形で「そんなにおかしいか『杉田水脈論文』」という特別企画を編み、さらに多くの批判を呼び込んだ。新潮社は９月25日に『新潮45』の休刊を発表することとなった。

こうした保守言論の同性愛に対する見解は、ネット言論によって増幅し、目につきやすいような構造ができあがっているが(倉橋2018)、実際は社会でそれほど多数を占める考えではない。筆者も分担者として関わった社会調査[(1)]では、同性婚の法制化に対する意見(複数回答)として、「伝統的な家族のあり方が失われる」を選んだ者は回答者全体のうち18.0％であり、「生殖に結びつかないから好ましくない」を選んだ者は11.3％にすぎなかった。なお、性別[(2)]で見ると女性より男性の方が、年齢層別に見た場合は20-30代より40-50代、そして60-70代の方が、これらの見解を支持する人の割合が多かった(図１)。

（2）　問題意識と手法

この調査の報告書[(3)]においては、性的マイノリティに対する様々な意識は、性別、年齢層別によって大きく異なることを明らかにしている。同性婚の賛否自体を被説明変数にすえた多変量解析でも、有意な説明変数として性別と年齢層が残った(石田2017)。

本稿は、それらの先行的な分析とは少し異なる視点からの分析を試みるものである。具体的には、性･年齢層をある程度統制した中で、「伝統的な家族のあり方が失われる」や「生殖に結びつかないから好ましくない」を選ぶ者は、それらを選ばない者と比べ、どのような意識の違いや正しい知識の有無の違いがみとめられるかを調べるところにある。また、「伝統的家族」を重視する言説と「生殖」を重視する言説

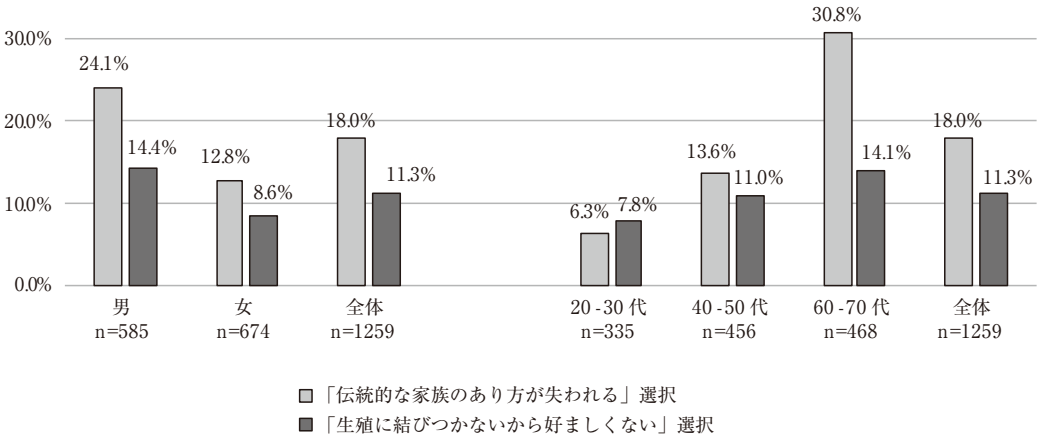

図１　同性婚の法制化に対する見解の選択状況（性別、年齢層別）

は、以下に引用する小川榮太郎のような保守言説においては一体となって語られるが、果たして人々の間でもそれが一体的であるかを検討する。

> 「結婚は古来、男女間のものだ。男女の結合が、親族の結合、一族の結合であり、そのことを通じて共同体として子種を後世に残してゆく。こうした結婚の仕組みは、暴力と隠蔽に付き纏われる性という暗い欲望を、逆に社会の最も明るい祝福の灯のもとに照らし出し、秩序化による安定と幸福の基盤となす、人類の生み出した最も偉大な逆説的叡智である。」（小川2018：88）

分析においては、（現時点の日本では変えることがそれほど容易ではないとされるような）最終学歴や業種といった変数ではなく、それらより変えることが可能と思われるような意識や知識に関する変数に着目する。そして分析を行った結果として、「伝統的な家族のあり方が失われる」を支持する層と、「生殖に結びつかないから好ましくない」を支持する層が、同質的なのか異質的なのかを検討する。

まず、研究１では、「伝統的な家族のあり方が失われる」や「生殖に結びつかないから好ましくない」への支持の有無によって、各種意識（ジェンダー平等や性的マイノリティ、外国人、障害者に対する態度）に関して差があるかどうかを調べる。続いて研究２では、研究１の変数を説明変数として投入した場合に、どういった変数が、「伝統的な家族のあり方が失われる」や「生殖に結びつかないから好ましくない」の支持を説明する変数として残るのかを調べる。その際、投入する変数の数を２つのモデルに分けて変えることで、規定変数の変化を調べるとともに、モデル全体の説明力を高めることも試みる。

なお、性・年齢層別の分析をするにあたり、回答者を次の４つの層へと分割した。「20-40代男性」（248名）、「20-40代女性」（324名）、「50-70代男性」（337名）、「50-70代女性」（350名）である。一つの層の中に占める年齢の幅は最大30歳と大きい。本来ならば年齢層は、婚姻をしていない者も多い20-30代、仕事をリタイアした60-70代、そして残りの40-50代といったように、最低３層に分けるべきであろうが、研究２で回帰分析を行うにあたり、３層では十分なサンプル数に

達しないことが判明したため、年齢層は２層とした。

２　研究１

（１）　検定変数

同性婚の法制化について「伝統的な家族のあり方が失われる」あるいは「生殖に結びつかないから好ましくない」と考える人々は、そう考えない人々と比べ、意識や知識に差がみられるかを平均の差の比較によって調べた。

まず、質問項目より**表１**にあるような５つの尺度を作成した。尺度の生成にあたっては、内的一貫性（α）を求め、項目数が３以上からなる尺度のみ、αを下げる項目を除外した。

①　ジェンダー平等感覚尺度。固定的性別役割分業や男性優先の考えに関する７項目（４件法、「そう思う」から「そう思わない」のリッカート尺度）を選び出して足しあわせた。値が高いほどジェンダー平等感覚が強い。得点範囲は７～28点。

②　トランスジェンダー嫌悪尺度。性別の変更や性別割当手術（「性転換手術」）への違和感・嫌悪感[4]に関する５項目（４件法、同上）を選び出して足しあわせ、点数を逆転化した。値が高いほど嫌悪感が強い。得点範囲は５～20点。

③　外国人増加嫌悪尺度。外国人の増加に伴う嫌悪感に関する７項目（４件法、同上）を選び出して足しあわせた。値が高いほど嫌悪感が強い。得点範囲は７～28点。

④　障害者増加嫌悪尺度。障害者の増加に伴う嫌悪感に関する２項目（４件法、同上）を選び出して足しあわせた。値が高いほど嫌悪感が強い。得点範囲は２～８点。

⑤　性的マイノリティについての日本における正しい知識に関する尺度。この内容にあたる質問を２項目（３件法）を選び出して足しあわせた（以下、正しい知識と略記する）。調査票では、問20ア「日本では、同性愛は精神病とされている」と問20イ「日本では、戸籍上の性別を変えることができる」のそれぞれについて、「正しい」「正しくない」「わからない」を選択する形式である。問20アについては、日本精神神経学会が精神疾患から同性愛を除外する見解を1994年に出しているため、「正しくない」を２点、「わからない」を１点、「正しい」を０点とした。問20イについては、手術等の一定の条件を満たした性同一性障害を抱える者に対して戸籍の続柄の変更をみとめる法律が2003年に成立し、翌年に施行されている。よって「正しい」を２点、「わからない」を１点、「正しくない」を０点とした。値が高いほど正しい知識を有しているとみなした。得点範囲は０～４点。

これら①～⑤それぞれを検定変数として、「伝統的な家族のあり方が失われる」の支持の有無と「生殖に結びつかないから好ましくない」の支持の有無をそれぞれグループ化変数として、平均の差を比較し、ｔ検定を行った。なお、それぞれについて、無回答の票は分析から除外している。

（２）　結果

平均の差の比較の結果一覧は**表２**の通りである。

１）　回答者全体

回答者全体についてみた場合、いずれの尺度についてもグループ化された変数に関しては統計的に有意な差[5]がみられた。同性婚の法制化に対して「伝統的な家族のあり方が失われる」に同意した人々は、同意しない人々に比べ、ジェンダー平等感覚が弱く、トランスジェンダー嫌悪・外国人増加嫌悪・障害者増加嫌悪が強かった。また、相対的に正しい知識を有していないことが分かった。

表1　各尺度の項目

			項目　（✓は分析にあたって採用した項目）	項目削除時のα
ジェンダー平等感覚尺度　α=.842				
問11	ア	✓	男性は、女性のような服装をするべきではない	.844
	イ	✓	女性は、男性のような服装をするべきではない	.805
	ウ	✓	男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべきだ	.805
問12	オ	✓	結婚後は、夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ	.828
	カ	✓	働き口が少ない場合、女性より男性の方が先に仕事につけるようにすべきだ	.828
	キ		一般的に、女性より男性の方が政治の指導者として適している	.842
問28	ア	✓	女性のような男性をみると、不快になる	.821
	イ	✓	男性のような女性をみると、不快になる	.825
			［削除する前のα=.839］	
			※選択肢はすべて　１そう思う ⇔ ４そう思わない 値が大きい方がジェンダー平等感覚が強い	
トランスジェンダー嫌悪尺度　α=.973				
問26	オ		仲の良い友人が性別を男性から女性に変えたら抵抗がある	.958
	カ		仲の良い友人が性別を女性から男性に変えたら抵抗がある	.959
問30	ア	✓	性別を男性から女性に変えるのはおかしい	.943
	イ	✓	性別を女性から男性に変えるのはおかしい	.943
	ウ	✓	性別を男性から女性に変えるのは気持ちが悪い	.943
	エ	✓	性別を女性から男性に変えるのは気持ちが悪い	.943
	オ	✓	性転換手術は道徳的にまちがっている	.952
			［削除する前のα=.956］	
			※選択肢はすべて　１そう思う ⇔４そう思わない 逆転化し、値が大きい方を嫌悪大とした	
外国人増加嫌悪尺度　α=.910				
問35	ア	✓	アメリカ人が増えること	.932
	イ	✓	中国人が増えること	.931
	ウ	✓	韓国人が増えること	.929
	エ	✓	中近東諸国の外国人が増えること	.920
	オ	✓	東南アジア諸国の外国人が増えること	.918
	カ	✓	西ヨーロッパ諸国の外国人が増えること	.927
	キ	✓	南米諸国（ブラジルなど）の外国人が増えること	.918
			※選択肢はすべて　１賛成 ⇔４反対 値が大きい方が増加に対する嫌悪大	
障害者増加嫌悪尺度　α=.863				
問36	ウ	✓	知的な障害を持つ人が増えること	-
	エ	✓	身体的な障害を持つ人が増えること	-
			※選択肢はすべて　１賛成 ⇔４反対 値が大きい方が増加に対する嫌悪大	
正しい知識に関する尺度　α=.877				
問20	ア	✓	日本では、同性愛は精神病とされている	-
	イ	✓	日本では戸籍の性別を変えることができる	-
			※選択肢は、正しい、正しくない、わからない	

「生殖に結びつかないから好ましくない」についても同様の結果だった。すなわち、その見解に同意した人々は、同意しない人々に比べ、ジェンダー平等感覚が弱く、トランスジェンダー嫌悪・外国人増加嫌悪・障害者増加嫌悪が強く、相対的に正しい知識を有していなかった。

2） 性・年齢層別

性・年齢層別に分けて分析をすると、異なる傾向もみられた。

「伝統的な家族のあり方が失われる」の見解に関しては、性・年齢層別の結果は概して、回答者全体の結果と同じ傾向が見られたが、違いもあり、見解への同意・非同意の間に統計的に有意な差がみられない尺度得点が出現した。20-40代男性では、見解の同意・非同意別で比べた場合、外国人増加尺度と正しい知識のそれぞれの尺度得点に有意な差がみとめられなかった。

「生殖に結びつかないから好ましくない」の見解に関しては、回答者全体の結果と性・年齢層別の結果との間に違いがみられた。50-70代では、おおむね、全体の結果と同じ傾向がみられたが、そのうち男性では障害者増加嫌悪尺度の得点に有意な差がみとめられなかった。20-40代男女の結果は回答者全体の結果との間に、明らかな違いが見いだされ、男女ともに外国人増加に対する嫌悪尺度の得点で有意な差がみとめられなかった。加えてその年齢層では、男性で障害者増加嫌悪の尺度得点が、女性で正しい知識の尺度得点に、有意な差がみとめられなかった。

以上から、まず、「伝統的な家族のあり方が失われる」については、性・年齢層別で見た場合の特徴がそれほどなかったと言える。言い換えれば、性・年齢層で分けてもなお、様々な多様性に関する意識や正確な知識は、「伝統的な家族のあり方が失われる」という見解の有無との間に関連性を有していた。

一方で、「生殖に結びつかないから好ましくない」という見解については、性・年齢層別で見ると関連する尺度が異なる結果となった。50-70代男女はおおむね全体の分析と似た傾向を持っていたが、女性については、この見解を支持する人に障害者増加嫌悪が強くみられる一方で男性ではそうではなかった。20-40代では見解の有無によって有意な得点差が見られた尺度は少なかった。男女で共通する変数は、ジェンダー平等感覚とトランスジェンダー嫌悪の尺度のみであった。よって研究２におけるロジスティック回帰分析でも、この見解を規定する要因は年齢層で大きく異なる可能性が示唆された。

３　研究２

（1） 説明変数

「伝統的な家族のあり方が失われる」や「生殖に結びつかないから好ましくない」の見解を規定する要因が何であるかを調べた。それぞれの見解について、同意する（選択する）場合を「１」、同意しない（選択をしない）場合を「０」に置き換え、被説明変数とした。他の変数の影響を排するために、ロジスティック回帰分析を採用した。

この分析を行うにあたり変数の多寡による２つのモデルを設定した。うち「モデル１」では研究１でとりあげた検討変数のみを投入した。

「モデル２」では、「モデル１」の変数に加え、次の３項目および後述の「政治観」をダミー化して追加投入した。

「問31　少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ」

「問32　日本人は他の国民に比べて、すぐれた素質をもっている」

「問33　欧米で行ったことはいずれ日本でも起こる」

表2　平均の差の比較

回答者全体	伝統的な家族のあり方が失われる	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	214	14.757	4.188	-14.202	***
	非選択	929	19.404	4.829		
トランス嫌悪	選択	213	15.779	3.879	17.115	***
	非選択	930	10.473	4.866		
外国人増加嫌悪	選択	209	21.641	4.325	5.862	***
	非選択	914	19.498	4.864		
障害者増加嫌悪	選択	217	5.747	1.480	5.675	***
	非選択	908	5.107	1.495		
正しい知識	選択	226	2.204	.866	-8.156	***
	非選択	969	2.738	.972		

回答者全体	生殖に結びつかず好ましくない	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	141	15.617	4.162	-8.645	***
	非選択	1002	18.944	5.031		
トランス嫌悪	選択	138	14.616	5.075	7.905	***
	非選択	1005	11.029	4.988		
外国人増加嫌悪	選択	134	21.306	4.902	3.612	***
	非選択	989	19.706	4.801		
障害者増加嫌悪	選択	134	5.642	1.577	3.372	***
	非選択	991	5.175	1.496		
正しい知識	選択	142	2.197	1.012	-5.549	***
	非選択	1053	2.696	.956		

20-40代男性	伝統的な家族のあり方が失われる	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	28	15.000	3.972	-5.170	***
	非選択	205	19.605	4.477		
トランス嫌悪	選択	29	14.931	4.225	5.037	***
	非選択	208	10.125	4.888		
外国人増加嫌悪	選択	27	20.704	5.224	1.142	
	非選択	207	19.536	4.968		
障害者増加嫌悪	選択	29	5.724	1.486	2.024	*
	非選択	205	5.122	1.502		
正しい知識	選択	29	2.172	.966	-3.022	
	非選択	214	2.752	.997		

20-40代男性	生殖に結びつかず好ましくない	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	33	16.485	3.970	-3.497	***
	非選択	200	19.475	4.638		
トランス嫌悪	選択	33	14.152	4.988	4.369	***
	非選択	204	10.157	4.854		
外国人増加嫌悪	選択	32	20.906	5.120	1.508	
	非選択	202	19.475	4.966		
障害者増加嫌悪	選択	31	5.419	1.669	.882	
	非選択	203	5.163	1.485		
正しい知識	選択	33	2.212	1.166	-2.928	**
	非選択	210	2.757	.965		

20-40代女性	伝統的な家族のあり方が失われる	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	13	15.154	3.934	-5.844	***
	非選択	290	21.793	4.010		
トランス嫌悪	選択	13	13.923	3.947	4.880	***
	非選択	290	8.497	3.922		
外国人増加嫌悪	選択	12	22.583	3.423	2.778	**
	非選択	287	18.686	4.804		
障害者増加嫌悪	選択	13	6.308	1.316	3.645	***
	非選択	275	4.753	1.511		
正しい知識	選択	13	2.385	.961	-2.125	*
	非選択	298	2.970	.972		

20-40代女性	生殖に結びつかず好ましくない	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	20	18.700	4.578	-3.123	**
	非選択	283	21.707	4.132		
トランス嫌悪	選択	19	11.211	5.422	2.092	*
	非選択	284	8.563	3.918		
外国人増加嫌悪	選択	17	19.294	4.985	.397	
	非選択	282	18.816	4.811		
障害者増加嫌悪	選択	18	5.444	1.723	1.781	†
	非選択	270	4.781	1.516		
正しい知識	選択	20	2.800	1.105	-.687	
	非選択	291	2.955	.969		

50-70代男性	伝統的な家族のあり方が失われる	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	103	14.233	4.300	-5.177	***
	非選択	193	17.135	5.097		
トランス嫌悪	選択	106	16.377	3.771	7.560	***
	非選択	203	12.478	5.175		
外国人増加嫌悪	選択	107	21.710	4.038	3.690	***
	非選択	196	19.724	4.699		
障害者増加嫌悪	選択	108	5.759	1.522	2.204	*
	非選択	199	5.377	1.412		
正しい知識	選択	112	2.152	.932	-2.740	**
	非選択	207	2.449	.922		

50-70代男性	生殖に結びつかず好ましくない	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	50	14.520	3.748	-3.091	**
	非選択	246	16.451	5.189		
トランス嫌悪	選択	50	15.560	5.092	2.676	**
	非選択	259	13.479	5.023		
外国人増加嫌悪	選択	50	21.760	4.260	2.275	*
	非選択	253	20.162	4.591		
障害者増加嫌悪	選択	49	5.469	1.660	-.219	
	非選択	258	5.519	1.423		
正しい知識	選択	51	2.000	.959	-2.907	**
	非選択	268	2.410	.918		

50-70代女性	伝統的な家族のあり方が失われる	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	70	15.357	4.136	-4.679	***
	非選択	241	18.174	4.516		
トランス嫌悪	選択	65	15.554	3.758	7.223	***
	非選択	229	11.515	4.671		
外国人増加嫌悪	選択	63	21.746	4.558	2.109	*
	非選択	224	20.304	4.860		
障害者増加嫌悪	選択	67	5.627	1.444	1.689	†
	非選択	229	5.284	1.467		
正しい知識	選択	72	2.264	.692	-4.224	***
	非選択	250	2.688	.926		

50-70代女性	生殖に結びつかず好ましくない	n	平均値	標準偏差	t 値	p
ジェンダー平等感覚	選択	38	14.684	3.771	-4.211	***
	非選択	273	17.938	4.548		
トランス嫌悪	選択	36	15.528	4.246	4.300	***
	非選択	258	11.973	4.699		
外国人増加嫌悪	選択	35	22.000	5.412	1.813	†
	非選択	252	20.429	4.717		
障害者増加嫌悪	選択	36	6.167	1.207	4.152	***
	非選択	260	5.250	1.466		
正しい知識	選択	38	2.132	.777	-3.827	***
	非選択	284	2.655	.894		

この３項目の回答選択肢は、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらはといえばそう思わない」「そう思わない」の４件法であり、前二者を「１」(〈はい〉)に、後二者を「０」(〈いいえ〉)に置き換えた。〈いいえ〉を参照カテゴリとした。

政治観については、「１保守的」から「５革新的」までの５件法でたずねていた。ただし、「５」を選んだ人が女性で少なかったことから(20-40代女性で１人、50-70代女性で２人)、「１」と「２」を併せて〈保守〉、「３」を〈中道〉、「４」と「５」を併せて〈革新〉とし、カテゴリを３つに統合した。〈保守〉を参照カテゴリとした。

これらの変数を分析に入れたのは、いわゆる「新しいナショナリズム」が、グローバルな状況に人々を適応させながらも国家への忠誠心を涵養させる両面性を持つためである。国家の維持・強化に国民が寄与すべきである、または、日本人に卓越性をみとめる、あるいは逆に欧米の追随でしかないという考えが、同性婚の法制化を「伝統的家族の喪失」や「非生殖」と結びつける要因となるかどうか、検討した。

変数の取捨選択は強制投入法で行った。また、モデル全体の説明力を擬似的に表すMcffadenの疑似決定係数(＝モデルのカイ二乗÷(モデルのカイ二乗 ＋ -2 対数尤度))を求めた。

（２） 結果

１）「伝統的な家族のあり方が失われる」に関して

本項に関するロジスティック回帰分析の結果一覧は表３の通りである。

① モデル１

回答者全体について、「伝統的な家族のあり方が失われる」への同意(選択)を被説明変数においてロジスティック回帰分析を行ったとこ

表３　ロジスティック回帰分析：伝統的な家族のありかたが失われる

被説明変数：「伝統的な家族のあり方が失われる」を選択

	モデル1				モデル2			
全体	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.101	.025	***	.904	-.092	.026	***	.912
トランスジェンダー嫌悪	.148	.025	***	1.159	.148	.026	***	1.160
外国人増加嫌悪	.038	.022	†	1.038	.038	.023	†	1.039
障害者増加嫌悪	.033	.069		1.034	.038	.070		1.039
正しい知識	-.117	.105		.890	-.114	.107		.893
結婚・出産奨励〈はい〉					.179	.263		1.196
日本人の卓越性〈はい〉					.240	.223		1.272
欧米の後追い〈はい〉					.284	.202		1.329
政治観(参照は〈保守〉)								
〈中道〉					-.164	.193		.849
〈革新〉					-.237	.316		.789
定数	-2.368	.884	**	.094	-2.977	.964	**	.051
分析ケース数	1043				1014			
Mcffadenの疑似決定係数	.199				.207			
20-40代男性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.205	.074	**	.815	-.160	.080	*	.852
トランスジェンダー嫌悪	.069	.057		1.072	.092	.061		1.097
外国人増加嫌悪	-.054	.055		.948	-.067	.058		.936
障害者増加嫌悪	.237	.180		1.267	.245	.188		1.277
正しい知識	-.332	.250		.718	-.347	.262		.707
結婚・出産奨励〈はい〉					-.310	.592		.734
日本人の卓越性〈はい〉					.251	.535		1.286
欧米の後追い〈はい〉					-.179	.489		.836
政治観(参照は〈保守〉)								
〈中道〉					-.928	.566		.395
〈革新〉					-.537	.761		.585
定数	1.186	2.194		3.274	.927	2.477		2.527
分析ケース数	223				221			
Mcffadenの疑似決定係数	.196				.206			
20-40代女性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.292	.098	**	.747	-.297	.104	**	.743
トランスジェンダー嫌悪	.048	.095		1.049	.006	.108		1.006
外国人増加嫌悪	.085	.096		1.089	.070	.100		1.072
障害者増加嫌悪	.306	.256		1.358	.272	.277		1.312
正しい知識	-.113	.400		.893	-.180	.442		.835
結婚・出産奨励〈はい〉					-.261	.901		.770
日本人の卓越性〈はい〉					—			
欧米の後追い〈はい〉					-1.130	.754		.323
政治観(参照は〈保守〉)								
〈中道〉					-.332	.801		.717
〈革新〉					-.451	1.300		.637
定数	-1.362	3.499		.256	.901	3.877		2.461
分析ケース数	277				270			
Mcffadenの疑似決定係数	.325				.325			
50-70代男性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.052	.036		.949	-.047	.037		.954
トランスジェンダー嫌悪	.152	.037	***	1.164	.134	.038	***	1.143
外国人増加嫌悪	.078	.036	*	1.081	.102	.038	**	1.107
障害者増加嫌悪	-.007	.110		.993	-.028	.112		.973
正しい知識	.067	.170		1.070	.058	.173		1.060
結婚・出産奨励〈はい〉					1.048	.498	*	2.853
日本人の卓越性〈はい〉					-.433	.358		.648
欧米の後追い〈はい〉					.539	.323	†	1.715
政治観(参照は〈保守〉)								
〈中道〉					-.209	.303		.811
〈革新〉					-.947	.493	†	.388
定数	-3.728	1.310	**	.024	-4.676	1.484	**	.009
分析ケース数	279				278			
Mcffadenの疑似決定係数	.142				.171			
50-70代女性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.012	.046		.988	-.010	.050		.990
トランスジェンダー嫌悪	.166	.048	**	1.180	.187	.053	***	1.206
外国人増加嫌悪	.036	.037		1.037	.031	.041		1.031
障害者増加嫌悪	-.084	.127		.920	-.113	.135		.893
正しい知識	-.246	.207		.782	-.304	.222		.738
結婚・出産奨励〈はい〉					.057	.442		1.059
日本人の卓越性〈はい〉					.564	.462		1.758
欧米の後追い〈はい〉					.546	.415		1.727
政治観(参照は〈保守〉)								
〈中道〉					.125	.368		1.133
〈革新〉					.677	.627		1.968
定数	-3.019	1.771	†	.049	-3.924	1.981	*	.020
分析ケース数	264				245			
Mcffadenの疑似決定係数	.125				.155			

ろ、ジェンダー平等感覚尺度、トランスジェンダー嫌悪尺度、外国人増加嫌悪尺度が説明変数として残った。ジェンダー平等感覚尺度が強くなるほど、「伝統的な家族のあり方が失われる」の見解を選ばなくなる、つまり負の寄与をすることが分かり（オッズ比（Exp（B））は.904）、トランスジェンダー嫌悪尺度や外国人増加嫌悪尺度の得点が上がるほど、「伝統的な家族のあり方が失われる」の見解を選ぶ、つまり正の寄与をすることが分かった（同1.159、1.038）。

20-40代男女では、ジェンダー平等感覚尺度のみが説明変数として残り、ジェンダー平等感覚尺度の得点が上がるほど、「伝統的な家族のあり方が失われる」の見解に負の寄与をすることが分かった（男性.815、女性.747）。

50-70代男性では、トランスジェンダー嫌悪尺度と外国人増加嫌悪尺度のみが説明変数として残り、それぞれ正の寄与をすることが分かった（1.164、1.081）。50-70代女性では、トランスジェンダー嫌悪尺度のみが説明変数として残り、正の寄与をもたらすことが分かった（1.180）。

モデルのあてはまり具合（Mcffadenの疑似決定係数）は、全体で.199、20-40代男性で.196、20-40代女性で.325、50-70代男性で.142、50-70代女性で.125だった。全体ならびに20-40代男性で得られた「.2」程度の係数は、投入変数が少ない割にはそれほど悪くない値と思われる。20-40代女性の「.325」は、モデル１程度の変数投入数でも、事象がよく説明されていることを示している。

②　モデル２

３の（１）で取り上げた追加投入変数を含めて分析を行った。

回答者全体では、モデル１と比べてオッズ比や疑似決定係数にわずかな変化がみられたが、有意な説明変数は変わらなかった。20-40代の男女、50-70代の女性についても同様の結果であった。

50-70代の男性については、モデル１とモデル２の間に顕著な変化が見られた。モデル２では、あらたに、「少子化対策として、結婚や出産を奨励すべきだ」や「欧米で起こったことは日本でもいずれ起こる」に〈はい〉と答える場合に、「伝統的な家族のあり方が失われる」の見解に正の寄与をすることが分かった（オッズ比は順に2.853、1.715）。これに対し、政治観は〈保守〉の場合に比べ、〈革新〉を選んだ場合に、当該見解に負の寄与をすることが分かった（.388、有意傾向）。なお、政治観や「欧米の後追い」が変数として効果をもたらすのは（後述の「生殖に結びつかないから好ましくない」についての分析を含めても）50-70代男性においてのみであった。

モデルのあてはまり具合は、変数追加の前後で変わらないか、変わったとしても.03程度であり、大幅な改善はみとめられなかった。

２）「生殖に結びつかないから好ましくない」に関して

本項に関するロジスティック回帰分析の結果一覧は**表４**の通りである。

①　モデル１

「生殖に結びつかないから好ましくない」への同意（選択）を被説明変数において、回答者全体についてロジスティック回帰分析を行ったところ、ジェンダー平等感覚尺度、トランスジェンダー嫌悪尺度、正しい知識の尺度が説明変数として残った。トランスジェンダー嫌悪尺度が強くなるほど、「生殖に結びつかないから好ましくない」の見解に同意する、つまり正の寄与をすることが分かり（オッズ比1.080）、ジェン

ダー平等感覚尺度が強くなるほど、また正しい知識を持つほど、その見解に同意しない、つまり負の寄与をすることが分かった（オッズ比は順に.928、.716）。

性・年齢層別に分けて分析をすると、全体の場合とはかなり違った結果が見いだされた。20-40代男性についてはトランスジェンダー嫌悪尺度のみが、また、20-40代女性についてはジェンダー平等感覚尺度のみが、それぞれ正の寄与、負の寄与の説明変数として残った（順に、1.144、.868）。50-70代男性については、回答者全体の分析で説明変数として残っていたジェンダー平等感覚尺度とトランスジェンダー嫌悪尺度は残らなかった。また外国人増加嫌悪尺度が正の寄与を、障害者増加嫌悪尺度が負の寄与をもたらし、正しい知識の尺度も負の寄与をもたらしていた（同、1.109、.748、.633）。**表２**にあるように、50-70代男性に関する平均の差の比較では、「生殖に結びつかないから好ましくない」という見解の有無別で障害者増加嫌悪の尺度得点には有意な差はみとめられなかったが、ロジスティック回帰分析では障害者増加嫌悪が高くなるほど、「生殖に結びつかないから好ましくない」という見解に賛同しなくなる、という結果となった。この結果は解釈の検討の余地を残した。50-70代女性については、障害者増加嫌悪尺度、正しい知識の尺度がそれぞれ、正の寄与、負の寄与の説明変数として残った（同、1.324、.631）。

②　モデル２

３の（１）で取り上げた追加変数を含めて投入して分析した。

回答者全体の分析では、モデル１の結果と比較したところ、モデル２において「少子化対策として、結婚や出産を奨励すべき」というダミー変数が新たに残ったことが新しく、この見

表４　ロジスティック回帰分析：生殖に結びつかないから好ましくない

被説明変数：「生殖に結びつかないから好ましくない」を選択

	モデル1				モデル2			
全体	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.075	.027	**	.928	-.055	.028	†	.947
トランスジェンダー嫌悪	.077	.027	**	1.080	.084	.028	**	1.088
外国人増加嫌悪	.031	.024		1.032	.040	.025		1.041
障害者増加嫌悪	-.041	.076		.960	-.053	.076		.949
正しい知識	-.333	.116	**	.716	-.337	.118	**	.714
結婚・出産奨励 ＜はい＞					.689	.324	*	1.992
日本人の卓越性 ＜はい＞					.030	.243		1.031
欧米の後追い ＜はい＞					-.006	.217		.994
政治観（参照は＜保守＞）								
＜中道＞					-.136	.217		.873
＜革新＞					.227	.317		1.255
定数	-1.259	.967		.284	-2.373	1.075	*	.093
分析ケース数	1043				1014			
Mcffadenの疑似決定係数	.106				.114			
20-40代男性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.055	.063		.947	-.035	.073		.965
トランスジェンダー嫌悪	.135	.055	*	1.144	.149	.061	*	1.160
外国人増加嫌悪	.027	.049		1.027	.034	.052		1.034
障害者増加嫌悪	-.105	.154		.900	-.141	.158		.868
正しい知識	-.345	.227		.708	-.388	.233	†	.679
結婚・出産奨励 ＜はい＞					1.139	.684	†	3.125
日本人の卓越性 ＜はい＞					.285	.481		1.330
欧米の後追い ＜はい＞					.048	.457		1.049
政治観（参照は＜保守＞）								
＜中道＞					.558	.494		1.748
＜革新＞					.234	.681		1.264
定数	-1.646	1.999		.193	-3.478	2.325		.031
分析ケース数	223				221			
Mcffadenの疑似決定係数	.139				.177			
20-40代女性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.142	.070	*	.868	-.124	.070	†	.884
トランスジェンダー嫌悪	.053	.074		1.054	.042	.074		1.043
外国人増加嫌悪	-.059	.065		.943	-.073	.066		.930
障害者増加嫌悪	.173	.187		1.189	.213	.192		1.237
正しい知識	.097	.302		1.102	.083	.309		1.086
結婚・出産奨励 ＜はい＞					.187	.706		1.206
日本人の卓越性 ＜はい＞					1.050	.684		2.858
欧米の後追い ＜はい＞					-.314	.523		.730
政治観（参照は＜保守＞）					—			
＜中道＞					—			
＜革新＞					—			
定数	-.411	2.629		.663	-1.279	2.754		.278
分析ケース数	277							
Mcffadenの疑似決定係数	.079				.106			
50-70代男性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.050	.043		.951	-.049	.045		.952
トランスジェンダー嫌悪	.039	.044		1.040	.029	.045		1.030
外国人増加嫌悪	.103	.043	*	1.109	.124	.045	**	1.132
障害者増加嫌悪	-.291	.130	*	.748	-.287	.132	*	.750
正しい知識	-.458	.207	*	.633	-.518	.210	*	.596
結婚・出産奨励 ＜はい＞					1.750	.787	*	5.753
日本人の卓越性 ＜はい＞					-.555	.425		.574
欧米の後追い ＜はい＞					-.145	.375		.865
政治観（参照は＜保守＞）								
＜中道＞					-.413	.376		.661
＜革新＞					.241	.497		1.273
定数	-.879	1.578		.415	-2.022	1.840		.132
分析ケース数	279				278			
Mcffadenの疑似決定係数	.088				.125			
50-70代女性	B	S.E.	p	Exp(B)	B	S.E.	p	Exp(B)
ジェンダー平等感覚	-.071	.057		.932	-.035	.064		.966
トランスジェンダー嫌悪	.090	.056		1.094	.110	.064	†	1.116
外国人増加嫌悪	-.012	.043		.988	-.011	.050		.989
障害者増加嫌悪	.281	.166	†	1.324	.219	.181		1.245
正しい知識	-.460	.266	†	.631	-.460	.287		.631
結婚・出産奨励 ＜はい＞					.138	.572		1.148
日本人の卓越性 ＜はい＞					.181	.565		1.199
欧米の後追い ＜はい＞					.474	.536		1.606
政治観（参照は＜保守＞）								
＜中道＞					-.552	.451		.576
＜革新＞					.457	.712		1.579
定数	-2.292	2.078		.101	-3.233	2.407		.039
分析ケース数	264				245			
Mcffadenの疑似決定係数	.146				.150			

解への賛成は、被説明変数に正の寄与をしていた（オッズ比は1.992）。ただし、モデルの疑似決定係数は.106から.114への変化であり、微増にとどまった。

20-40代男性では、上述と同じダミー変数が正の寄与をしていた。加えて、正しい知識の尺度の得点が負の寄与をもたらしていた（順にオッズ比は3.125、.679）。回答者全体の分析結果とは異なり、ジェンダー平等感覚尺度は説明変数として残らなかった。

20-40代女性では、ジェンダー平等感覚尺度のみが説明変数として残り、モデル１との差異はほとんどなかった。

50-70代男性では、新たな説明変数として「少子化対策として、結婚や出産を奨励すべき」というダミー変数が残った（オッズ比は5.753）。

50-70代女性では、モデル１で説明変数として残った障害者増加嫌悪尺度と正しい知識の尺度が消え、代わりにトランスジェンダー嫌悪尺度が正の寄与として残るという不安定な結果となった（オッズ比1.116）。

モデルのあてはまり具合は、50-70代男性において多少改善されたものの（差は.037）、概して高くなく（係数は.10～.18程度）、「生殖に結びつかないから好ましくない」という見解に対しては、今回取り上げなかった別の要因が規定要因として働いていることが示唆された。

４　結論

平均の差の比較（研究１）においては、「伝統的な家族のあり方が失われる」や「生殖に結びつかないから好ましくない」の２つの見解の同意・非同意と、意識や知識に関する様々な尺度は関連性を有していることが分かった。

しかし、それらの変数を説明変数においたロジスティック回帰分析を行ったところ（研究２）、説明変数として残った変数は限定的であった。回答者全員を対象とした場合は、ジェンダー平等に関する意識とトランスジェンダー嫌悪に関する意識が、それぞれ２つの見解に対する共通した説明変数として残った。ただし、性・年齢層別に分けて分析をしたところ、「伝統的な家族のあり方が失われる」と「生殖に結びつかないから好ましくない」に対しては、それぞれかなり異なった変数が規定変数として残る結果となった。

これは、「伝統的な家族のあり方が失われる」あるいは「生殖に結びつかないから好ましくない」という見解が、説明変数の相互の影響を排して分析をした場合に、一体的な価値観から構成されてはいないことを示すものである。

今回は、最終学歴などの日本では変えにくいとされる社会経済属性より、意識に焦点をおいた分析を行った。説明変数を限定的にしたため、モデルのあてはまり具合はそれほど良好な数値を得ることはできなかったが、回帰分析を行ったことにより、他の変数の影響を排した場合に被説明変数に影響を与える変数が何であるかが明らかとなった。

このことは、各性・年齢層に対してそれぞれに相応の働きかけをすれば、今回検討した「伝統的な家族のあり方が失われる」や「生殖に結びつかないから好ましくない」という同性婚の法制化にまつわる価値観が変わることを予測するものである。

例えば、ジェンダー平等を啓発し、意識の変化がもたらされると、20-40代男女では同性婚法制化に対して「伝統的な家族のあり方が失われる」と答える層が、また、20-40代女性で「生殖に結びつかないから好ましくない」と答える層が少なくなることが予測される。トランスジェンダー嫌悪が緩和されると、50-70代の男女で「伝統的な家族のあり方が失われる」と答える層が、また、50-70代の女性で「生殖に

結びつかないから好ましくない」と答える層が少なくなることが予測される。外国人増加への嫌悪を緩和する働きかけがされた場合には、50-70代男性の「伝統的な家族のあり方が失われる」ならびに「生殖に結びつかないから好ましくない」と答える層が少なくなることが予想される。同様に、性的マイノリティに対する正しい知識の普及は、同性婚の法制化を「生殖に結びつかないから好ましくない」と考える男性における層を少なくさせることが予想される。また、男性の中で、「少子化対策として、結婚や出産を奨励すべき」という考えが緩和されれば、「生殖に結びつかないから好ましくない」と答える層が大幅に少なくなることは、ロジスティック回帰分析における男性のこの項目の、大きなオッズ比から推測できる。

同性婚の法制化に関する人々の意識は、小川榮太郎の主張するような、結婚と生殖とを一体的に考える価値観に必ずしも支えられているわけでは必ずしもないことが分かる。社会において性・民族・障害の有無などについてダイバーシティを確保することは、性・年齢層ごとにそれぞれ異なった作用を生みながらも、同性婚の法制化に対する人々の意識を否定から肯定へと変化させることにつながると考えられる。

【註】

(1) この社会調査は、2015年３月に、「男女のあり方と社会意識に関する調査」という調査タイトルで、日本在住の20-79歳個人を対象に行われた。住民基本台帳を用いた層化二段無作為抽出法により、全国130地点から2,600人を抽出した。訪問留置によって調査協力を依頼した。回答モードは訪問回収と郵送返送の２種類を設けた。有効回収票は1,259票（回収率48.4％）、回収票中の郵送返送の占める割合は4.8％だった。

(2) 調査報告書および本稿の「性別」は「性自認」を表している。調査票では、問54で戸籍上の性別をたずねたのちに、問55で「ご自身の性別」が「戸籍上の性別と同じだと認識して」いるか（つまりシスジェンダーかどうか）を「はい」「いいえ」でたずね、この問いで「いいえ」を答えた者のみ、さらに問56で「ご自身の認識にもっとも近いもの」として「男」「女」「その他（　）」をたずねている。問54と問56で「同じ」性別を答えている者が若干名おり、問55、問56では無回答も一定程度出現したが、問54と問56で逆の性別を答えたのは各１名だった。この各１名を入れ替えて、「性自認」という変数を作成した。なお、問56で「その他」を選んだ者は0人であった。結果、性自認による男女数は戸籍上の性別として申告された数と同じ、男性585名、女性675名となった。各設問の無回答数も含めた詳しい処理の仕方は、注(3)の報告書203-204頁を参照。

(3) 釜野さおり・石田仁・風間孝・河口和也・吉仲崇『性的マイノリティについての意識：2015年全国調査報告書』全文のPDFは下記に上がっている。http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf

(4) 調査において、性的マイノリティや外国人、障害者に対して、違和感・嫌悪感などの否定的感情を中心に測定した理由は、①大学生を対象にした先行研究の調査において否定的感情をたずねていること、②仮に肯定的な感情を測定できたとしても、それは性的マイノリティに対するステレオタイプの確認にとどまる可能性があること（例えば「同性愛者には繊細な人が多い」）などによる。報告書24-25頁参照。

(5) 本稿では、有意水準（p）の記号を、p<.001の場合は「***」、p<.01の場合は「**」、p.<.05の場合は「*」とし、統計的に有意とした。p<.10の場合は「†」と表し、統計的に有意傾向があるとした。探索的な研究であるため、p<.10までの結果を含めて、変数間の関連性を検討した。

【文献】

石田　仁　2016「同性婚」釜野さおり・石田仁・風間孝・河口和也・吉仲崇『性的マイノリティについての意識：2015年全国調査報告書』.

――――　2017「同性婚法制化の賛否に関する多変量解析」日本女性学会2017年大会自由報告、中京大学、6月18日.

倉橋耕平　2018「右派論壇の流通構造とメディアの責任」『世界』10月号.

小川榮太郎　2018「政治は『生きづらさ』という主観を救えない」『新潮45』10月号.